

私達は心を弾ませ米軍の貨物船に乗船しました。台湾沖付近海で、乗船者のうち二人がマラリアのため死亡し、海中に葬るようなこともありましたが。そのころ私も発熱し、苦しい中にも「せめて日本の土を踏んでから死にたい」と心の中で念願していましたが、幸いに命永らえ懐かしの故郷日本の名古屋港に上陸することができたことは神仏のお陰と深く感謝いたします。

岐阜県引揚者世話係を経て飛騨地へと帰還して参りました。昭和二十一年六月六日、命を国家に捧げ皆様に最後の別れを告げて出征した私、恥ずかしながら再度国府村に帰郷しました。まず役場を訪れ、村長梶谷吉之助氏に復員の挨拶をしました。村長さんからは私の帰還を心温まるお言葉で迎えて下さいました。

また、兄虎雄の戦死の旨を聞かされ、初耳でただ茫然とするのみでした。私の出征の際、兄はわざわざ岐阜駅までも送りに来て、私への励ましの言葉で別れたのが永遠の別れとなりました。二カ月後に兄は二回目の召集を受け、中部四部隊に出征し、サイパン島において玉碎し名誉の戦死を遂げました。今は軍神として

靖国神社に祀られている兄に対し、ただ瞑目合掌するのみです。

終戦後からはや五十余年、走馬灯の回転のように時は過ぎ去り、平和な日本の今日このごろ、私はお陰様にて健康に恵まれ、一日一日を楽しく生活のできることに對して感謝しております。

ジャングルの彷徨

京都府 矢野 美三雄

昭和二十(一九四五)年五月七日、日独伊の枢軸国の有力な一翼のドイツ軍が連合国軍に降伏した。ドイツはフランスと陸地続きの一大強国で優秀なゲルマン民族であるが、有史以来幾度となく国境の紛争を繰り返し、第一次世界大戦においてもセルビアの一青年のはなった一弾が大战の引き金となり日本と敵対した。その時日本は世界に名を挙げ、ドイツ領有の島々も日本の委任統治領となった。私らの幼いころは小学校読

本に「南洋だより」として常夏の島が童心に焼きついていた。この勤勉で質素な国民性のドイツ魂も連合国の余りある資源には抗し得ず、お手上げとなり枢軸国の一端は崩れた。

ドイツ降伏以前に日本の国情に良く似たイタリアは、一九四三年九月八日にドイツより二年近くも早く敗退していた。私が従軍中昭和十八年十月ごろ、日本に接収されたイタリア軍艦の曳航を見た。

じり貧で敗北を続ける日本もやがては豊富な資源大國のアメリカにこのように捕獲され、光榮ある軍艦も一握りの屑鉄の山として処分されるのではないかと、危惧の念を抱いたものである。

当時は軍艦マーチで始まる日本海軍の戦果報道のみ聞かされているデマ放送も内緒で盗聴した。「こちらがインド、デリー放送であります。日本軍は天皇陛下に、嘘を申し上げ、惨敗を糊塗し逆に大勝利と申しています。日本は大嘘つきであります云々」と、まるで戦勝のみを期待し、「撃ちてしまむ」の精神を叩きこまれている我々は、まさに狐と狸のたましいあいだな

あと話し合っていた。

一方、目を太平洋戦線に転ずるに、アメリカ軍は昭和十九年七月にサイパンを占領し、日本海軍の不沈空母も潰えたのであるが、平和裡に南進した邦人も哀れ、か弱き女性ともども玉砕した。

私はサイパンの戦いで、かつての上司の主計科士官が戦局ますます不利となり、防諜防備に寧ろないころ、海軍のスマートを誇りとする気持ちを持って白服で市街をかつ歩し、スパイ容疑で血眼になっている軍の手で捕らえられ処刑されたと聞いた。しかし、彼は優秀な主計科士官であり、また文人でよく詩をつくり、その話しぶりはユーモアで聞く者を退屈させない良い人であったのにと、追慕の念を新たにするものである。

昭和十九年十一月、B 29爆撃機により本土来襲一月前の十月、敵軍最高指揮官マッカーサー元帥は「アイシャルリターン、フィリピン」と、国民との約束通り帰還し、連合軍の足並みを揃えた統制作戦はなかなか立派であったと戦後称讃された。

死を美化し君のため国のためと、次から次へと玉砕

し、物資よりも精神を尊んで戦線のこう着を見た日本軍に対して、人命を重んじ無限の物資で充分補給し、心豊かに戦ったアメリカに対しては負けるべくして負けたのである。

さらに昭和二十年二月には硫黄島の陥落、四月一日には沖繩本島の失陥、乾坤一擲の水上特攻（戦艦大和）とか航空特攻を行ったが成果上がらず、日本国土の沖繩は完全に制圧されたのである。

アメリカ軍の最終目標は、昭和二十年十一月南九州に、翌年三月には関東平野に上陸し、日本に対して最後のとどめを刺すつもりであったと聞く。

私は先年、千葉県九十九里浜を見る機会を得たが、長い海岸線の砂浜に上陸用舟艇で上陸するのはたやすいのではないかと素人考えで思ったことがあった。防備は長い線を守り攻撃は点を最終的にするのであるから問題ないであろう。

石油の一滴は血の一滴に当たるとまでいった当時の国策であるので、我々は日本が重要なボルネオ島のパルク・パパンを見捨てることは断じてないと淡い希望を

抱いていたのである。舳艫相組んだ艦隊の連合艦隊が救援に来てくれるであろうとの淡い儚い一縷の望みをかけていたのは私だけではなかったと思う。

従って焦熱の地で戦う私どもは、多大の焦燥感や不安感があったが、運命と諦め気持ちを引き締めて身体を大事にした生活であった。

昭和二十年五月一日にボルネオ本島東方のタラカン島が襲われ玉砕した。同島は北緯三度にある小島で、セレベス海に面し、本島とは狭い海峡で隔てられ、良質の石油を産出し、海軍第一百一燃料廠タラカン支廠が置かれ、また第二十二特別根拠地隊第二警備隊があり、司令以下軍人軍属二一七〇人で名実共に海軍の重要担当地区であった。

昭和二十年九月初め、全員玉砕のはずの同島より運の良い生き残りの勇士が続々と私らの集結地サマリンダへ合流した。国際法の定めか、終戦までの捕虜は背中にPと書いた敵側の服を着せられていたので、私たちは初めて本物の捕虜を見たのである。

連合国作戦計画ではパルク・パパンは濠軍第七師団の

攻略になっていたようだ。南ボルネオは日本では海軍担当地区と決められ北ボルネオは陸軍受け持ちであった。

当地の海軍兵力は三九〇〇人で、タラカンから二十年初頭到着した陸軍一個大隊も加わったが、同隊は水没部隊で装備不十分であった。また非戦闘員軍属一〇〇人、台湾人一〇〇〇人が混在した。

パルクパパンの防衛は重砲、高射砲が配備されて、なかなか堅固であった。この砲台の建設についての思出であるが、私は海軍工廠会計部より転属の先任の雇員であったのでなかなか責任重大で、工廠では主に物品会計の係で、南方の経理部に派遣されてからは臨時軍事費の金銭会計係に替わった。

某日、上司の経理部支部長から呼び出され何事ならんと参上したところ、「君は工廠会計部出身であるから砲台建設の工事費計算をやれ」との仰せであった。海軍工廠は艦船兵器の造修を主任務としているが、呉海軍工廠砲撃部の技術科士官が部下を連れて来て、内地から運ばれた砲の整備をし、施設部が据え付け工

事をする。それまでは半作品であるが、工事完了せば兵備品兵器として軍需部へ庫納し、兵備品出納命令官より部隊の砲撃長の兵備品取扱主任に供用するというのが会計法規上の手続きのあらましであるが、現地での工事命令書は呉の海軍工廠長が出す。それ以後の経理計算をして工事費計算書を提出せよとのことであった。

私の工廠での事務は材料費の予算決算で、軍に金額のみで、材料の品名は技術部門の専門で、流れは判るがこれは大役だなど直感した。されど命令となれば致し方ない。会計法規を研究し、ない頭で知恵を絞ったが、戦局が日増しに悪化したので事務上のことは未完に終わった。この経験を通して私が後日思ったことは、何時でも何でも研究し即応出来なくてはならぬということだった。

防備おさおさ怠りないパルクパパン攻城の第七師団の敵前上陸予定日は、当初六月二十八日になっていたが、その後七月十日に変更され、更に三転して最終的には七月一日に設定された。

連合軍は上陸作戦発動に先立ち、パリクバパンとサマリンダ周辺に数回に分けて落卜傘あるいは潜水艦でスパイを送りこみ、原住民を通して日本軍の動静を探っていたのである。このことも後日判明したのはもちろんであるが、昭和十九年より二十年となると空襲も日常の日課となり、夜は火矢を飛ばして敵機に軍事施設を知らせていた。しかし、原住民は白色オランダ人をブランダと称して毛嫌いし、蘭領東印度として同国の

支配圧政を極度に嫌悪した者もあって、彼らスパイも多くは日本軍に発見され、ある者は日本軍との交戦で戦死し、または捕らわれ、多くは国際法などは無視され軍事裁判抜きで残虐な首切りで処刑されたのである。

私が目にした例は年端の行かない原住民少年が利敵行為をしたとの疑いで特警隊に捕まり、同隊の前庭の本に荒縄で縛られていた。少年は命惜しさと肉親恋しさに大声をあげ泣いていたが、敗色日に濃くなる日本海軍特警隊は情け容赦なく犬の首でも斬るようにポトン（切り落す現地語）したのである。もちろん正式の軍律裁判もなかったであろう。

日本特警隊員も故国にはあるいは同年輩の子供があつたかも知れないのに、軍の至上命令で致し方なかったのである。なおこの特警隊長は終戦後戦犯に指名されたが判決を待たずに自決されたとのこと。

私ら非戦闘員の軍属の頭でも四囲の情勢で判断するに、原住民の日本軍に対する信頼度の低下を見ても、敗戦へのスピードも加速度的に進み、昭和二十年に入るともう駄目だと感ぜざるを得なくなった。

昭和二十年六月五日早朝、「戦爆連合二〇〇機大挙パリクに向かう」との情報入る。過去何十回となく空襲の洗礼を受けている当地も、同年五月にボルネオ東部タラカン玉砕後のことでもあり、ついにわが身にも最期が迫って来たと皆神経を尖らせ、緊張も極度に達し顔も蒼白となっていた。

爆撃を避けつつ庁舎内に入ったところ主計大尉が真っ赤な顔をして震え声で口を開いた。「たった今、司令部から通知があり、第四砲台が敵艦三十数隻を沖合に発見、ただちに『千早二号作戦』が発動された。諸君はすぐ所定の行動に移る、まず書類を今日中に焼却す

る。諸君の武運長久を祈る」と。

これは大変なことになった。それでも自分の心の中ではまだ事情がピンとこない。二、三の戦友と話しているのもつかの間、白色の濠軍艦隊の巡洋艦数隻が艦砲射撃をしつつ来攻する様はあたかも一幅の絵であったが、感傷にふける暇はない。有力で命中率も高い艦砲の一弾一弾は、ずしんずしんと腹に伝えて敵の威力に皆恐れおののいた。

当地の艦船部隊各庁は、交戦状態に入ればただちに根拠地隊司令官の指揮下になり戦うとの体制が定められていたのである。

まず機密書類の焼却が第一である。経理部庁舎の東側は空き地になっているのでそこに長さ三メートル幅二メートル深さ一メートル程度の穴を全員で掘った。赤道直下の午後三時ごろで、じっとしていても汗が吹き出す炎天下の労働となれば灼熱の太陽の直射で頭がくらくらする。

空襲は毎日あっても、艦砲射撃を伴った上陸作戦の最悪までいってなかった昨日までは、原住民もなんと

かいうことを聞き協力していたが、今日はいち早く逃げて姿も見せない。私も今までは三時ごろは午睡の時間であるのにいよいよ苦しく追立てられる気持ちであった。それに二年現役の主計科士官の命を志願の下士官が従わず、同僚間でも意見が合わずが身本位となりつつあるのも悲しいことであった。

穴掘り作業は全員の一致協力により一時間ほどで完了し、そこへ書類を投げ込み焼却するのだが、紙は束にして燃やすとなかなか燃えない。書類綴りをばらして数枚ずつ投げ込むが、これが遅々として進まない。燃えている紙から発生する上昇気流で投げ込んだ紙はひらひら舞い上がる。暑さの中の作業は、まさに「灼熱地獄」とはこのことかと感じた。されど焼却作業は日没前に終わる必要がある。今までも空襲に当たってはどんな小さな明かりでも目標になったのであるが、今日は一段と注意をしなくてはならぬ。すなわち残り火があれば艦砲の集中は、火を見るより明らかであった。昨日までは戦陣の合間に南十字星の輝く星空の下で家郷を語り、海辺で吹く風で涼をとり、戦い済んで内

地帰還後の設計を夢物語のように話し合っていたが、もうそんな悠長ではない。

明ければ六月六日、ほとんど不眠不休の朝七時に經理部職員約四十人（そのころは、花の如く麗しく、妹のように優しかった南進女性の理事生も、昨年九月二十日に引き揚げていたから後は武骨な男子ばかりであった）全員集合を命ぜられた。敵上陸も時間の問題となつた。

そのころ、陸海軍協定により私ら海軍軍属は陸軍灘部隊に召集令状もなく現地召集され、名目上は陸軍二等兵となり海軍部隊に配属となつたと口頭で申し渡しを受け、身分は元の海軍嘱託（部内限判任官待遇）という複雑な処遇で、服装は今まで通りで指揮命令も徹底を欠いた。部隊の編成も第二十二特別根拠地隊が主力であるので戦闘隊三個大隊であつた。

会戦となれば何といつても兵糧が第一であるが、それでも軍票も大切であつたので、私は給与隊の給与係を命ぜられ価値の低下した軍票を苦力に担わせ、ポルネオの奥地へ大河マハカム河の流域を引き退いたので

ある。変則的な編成の悲劇であるが、平素は軍合を行わない二年現役の主計少佐が上級者なので大隊長を任命され、正式な海軍軍人軍属や邦人の指揮統率に当たつたのである。

日本軍の装備は三八式歩兵銃や機銃、手榴弾それに背中に軍刀を負う、それも自動車のスプリングで急造の物で戦国の落武者とでもいうべきであつた。この主計少佐は血迷つた現地軍首脳の間違つた作戦編成の犠牲となり、後日多くの原住民をスパイ容疑で虐殺し、炭坑へ死体を投げ捨てた罪により戦犯として気の毒にも処刑されたのである。

今にして思えばいかに命令なりしといえども、また食うか食われるかの戦いでも最高学府を卒業、立派な主計科士官として常識も備え、人間的にも善良であつた彼の人が人命軽視の蛮行に走つたのは、これも負け戦の焦りと群集心理の「やれやれ！」という掛け声の拍車に負けたのであると、気の毒に思うのみである。

敗戦の落人の悲話の数々。野戦第一線より機銃か砲弾でやられたのであろうか、兵隊が片手をぶらりとし

て下がって来た。とても戦える力もなく、それどころか戦傷死寸前というべきであるのに、軍律厳しく小隊長の特務士官が「何故逃げて来たか！ 死ぬまで守れ、戻れ戻れ、ぶった切るぞ」と軍刀に手をかけているも哀れであった。

盲貫銃創の弾片抜き手術も木陰のカンバスのベッドに傷病兵を寝かせ、手足を縛り麻酔もかけず、軍医が泣き叫ぶ負傷者を荒療治するのを見て、私は生き地獄とはこれかと思った。

山中敗走六〇キロの道中では、旧知の尺八をよく吹く兵曹が、マラリアとアメーバ赤痢で路傍で末期の水を求めているが、私自身も水筒の水も乏しく「後から救援隊が来るから」と嘘をつき、今でも罪作りであったと思っている。

今次大戦もなんとか終わり戦後五十余年、生き残りの戦友と戦友会で語り合う私は、まあまあ幸福であるとう亡き戦友にお礼を申したい。

南の国の抑留 恋飯島

愛知県 森 由治

昭和十五年旧制中学校を卒業した私は、地元の豊川海軍工廠に入廠した。仕事は、工事単価計算の基礎データを作る機銃工事記録員であった。当時は「青雲の志」に燃え、陸軍士官学校を受験するつもりであったので、ここに勤めていては合格の見込みがないから、理屈を言って工廠を辞めさせてもらい、名古屋に出た。

しかし、働かねば生活ができぬから職業安定所に行ったところ、「気象技術要員」のポスターが目についた。魅力は食う心配がない、成績がよければ中央気象台所属の測候技術官養成所（旧制専門学校）に陸軍委託学生として官費入学できるということであった。

昭和十六年三月、第八期「陸軍技術要員」として陸軍気象部の門をくぐり、第二十五戦隊気象隊動員下令により、第二十五軍の隷下部隊に入り、大東亜戦開戦